

時間の現在主義の可能性

—様相と時間の平行性をもとに現在主義は擁護可能か?—

小山 虎

1 はじめに

時間の現在主義とは、大まかに述べると、現在であるもののみが存在しうる、という立場である。この主張は、存在しうるものにはかなり大きな限定を加えているという意味で、極端な主張と言ってよいだろう。とは言え、時間について我々が持っている直観には現在主義を支持していると思われる節もある。たとえば、現在であるものが存在することを疑う人はいない。しかし過去の存在者は現在の存在者と比べると「もはや存在していない」と言いたくなる場面は確かにあるし、未来の存在者はそもそも「未だ」存在していないという言い方はごく自然な言い方である。このような事情を考えると、たとえ現在主義が維持しえない立場だとしても、どのような理由で維持しえないのかは明らかにされるべきであろう。

ところが、D.H.Mellor や D.Lewis にとって現在主義はそもそも考慮すべき立場ですらない。彼らはその誤りを自明として現在主義を退けているように思われる。たとえば Lewis は、時間的内在的性質 (temporary intrinsics) の問題に対する現在主義者の解決法に対して、現在以外の時間が存在しないのならば、過去や未来への言及は言わば現在の誤表象にすぎない。すると時間を通じて持続すること (persistence) や変化を否定しなければならなくなる、という理由でそれを退ける¹。しかしこれはあまりにも性急な議論である。過去や未来への言及がどのように解消されるのかは現在主義の抱える大きな課題だろう²、Lewis に対してどのような反論をするにせよ、そのような言及が最終的に現在に帰着しなくては現在主義とは言えないだろう。だが、それが持続や変化の否定を含意しているとは言えない³。現在主義者には持続や変化を原初的現象として前提する選択肢もあるからだ⁴。

もちろん、現在主義には直観的には問題を引き起こすような帰結が含まれているという指摘は決して的外れではない。そして現在主義があまり受け入れられない（たとえば Sider は「多くの人にとって支払いたくない代償だ」と言う⁵）のは、少なくとも説明を要するような帰結を持つところに原因があるのだろう。しかし直観的に違和感のある帰結を持つ、という点では Lewis が（まともに）考察の対象としている他の方針も同じだ。Lewis 自身が支持する立場は時間的部分の存在論を要求する⁶。また、Lewis が否定するもうひとつの立場だと、時間と関係づけられた性質しか認められず、したがって時間的内在的性質は関係に還元される、あるいは時間的内在的性質に関する主張は文字通りには真ではない⁷。

むしろ、Lewis が問題にする時間的内在的性質に関するかぎり、通常の意味の性質だけを必要とし、矛盾した性質を同一の個体を持つこともない現在主義は、まっとうな主張であるとも言えよう。私が思うに、必要なのは、現在主義にどのような問題点があり、そのような問題点を持たない他の立場とどのような関係にあるのかを明らかにすることではないだろうか。

2 時間と様相の平行性

一口に現在主義と言っても様々であろう⁸。現実には現在主義は様々な動機によって支えられており、どの動機に力点を置くかで違いが生じる。本論文では、特に最近の現在主義者の主張に注目したい。もちろん、最近の現在主義者を Prior などの過去の高名な現在主義者と区別する明確な特徴も存在しないように思われるが、強いて言えば、時間の哲学と様相の哲学の平行性を重視する点を挙げることができるだろう⁹。実際、現在主義は時間版様相現実主義として規定されることもある¹⁰。最近の現在主義者を特徴づけるテーゼの候補として、次のようなものを考えたい。

(MT) 様相の形而上学と時間の形而上学にはパラレルな関係が成り立つ。

このようなテーゼのもとでは、現在主義は様相現実主義 (modal actualism)

に、反現在主義は様相可能主義(modal possibilism、様相実在論 modal realism)の方が通りがいいかもしれない)と対応することになる。ここで言う様相可能主義とは可能的にのみ存在する存在者も現実中存在する存在者と同等に存在するという立場であり、様相現実主義は現実中存在している存在者だけが本当に存在していると考えられる立場である。この二つの立場を比較すると、様相可能主義の方が理論的に単純だとは言えるけれども、説明を要する現象を多く含むと思われる。ひとつ例を挙げておくと、様相可能主義によれば現実には存在しない存在者(たとえばウィトゲンシュタインの子孫)も我々自身と全く同じ意味で存在していることになる。これは理論的単純さのために払うにはなかなか大きい代償である。

(MT)に同意するならば、これと同じことが時間に関しても当てはまると考えられる。つまり、反現在主義はすべての時間的存在者が等しく存在することを認めるが、現在主義では、本当の意味で存在することが認められるのは現在の存在者に限られる。反現在主義を採用するならば過去存在者と現在の存在者との関係であるとか、未来の出来事への言及も文字通りに解釈することが許される(よって理論的に単純になる)。そして、様相可能主義のように、現在ではまだ存在していない存在者(たとえば1000年後の子孫)も我々自身と全く同じ意味で存在していることになる。そして様相と時間の平行性を重視する現在主義者は、このような議論が可能であることは、反現在主義が様相可能主義と同様に疑わしい立場であることを示していると言う¹¹。

だが、様相の場合とは異なり、時間に関してはこのような帰結はそれほど受け入れがたいものではない、と思われるかもしれない。もし我々の住む世界が四次元的であれば未来の存在者と過去存在者、さらには現在の存在者も特に異なるわけではない、と考えられるからだ¹²。したがって、(MT)のような類いのテーゼを否定し、様相現実主義を取りつつ現在主義を否定すべきだ、と考えられるかもしれない。

だが(MT)は単なる類似性にも依拠しているのではない。現在主義を擁護する別の議論を確認することでそのことを明らかにしよう。

Markosianによれば¹³、最近の時間のB論者の中には、次の二つのテーゼから時間のB理論と反現在主義が帰結すると考える哲学者がいる¹⁴。

(IT) 時制に関する表現は、発話の文脈によって指示対象が変化する指標的表現の一種である¹⁵。

(ET) 時制を含む文の真理条件は時制を含まない文によって与えることができる¹⁶。

彼らは、(IT)と(ET)は時間的実在にとって時制が本質的でないことを示していると考える。そして、どれほど時制が我々の言語や思考に深く結びついているとしても、時制を含む文の真理条件がそれが発話された文脈を特定すれば無時制の文によって与えられるということは、時制には形而上学的含意はなく、出来事が無時制的に持つ時間的前後関係だけで十分だ、と主張される。このような主張を一步進めて、無時制的に存在する出来事によって構成される存在論が望ましい、と言うこともまた可能だろう。

この主張の様相版を構成することが可能である。まず、時制の対応物として、「可能である」や「必然である」といった様相的表現を考えることにしよう。すると、(IT)と(ET)の様相バージョンは以下ようになる¹⁷。

(IM) 様相的表現は、発話の文脈によって指示対象が変化する指標的表現の一種である。

(EM) 様相的表現を含む文の真理条件は様相的表現を含まない文によって与えることができる。

これらをもとに次のように主張できよう。この二つのテーゼは様相的実在にとって様相的表現が本質的でないことを示しており、様相的表現を含む文の真理条件が様相的表現を含まない文によって与えることができるということは、様相的表現には形而上学的含意はなく、可能世界が非様相的に持つ到達可能性関係だけで十分だ。また、そのような可能世界によって構成される存在論こそが望ましい、と。このような主張にはどれほどのもつもらしさがあるだろうか。

もちろん、このような議論に賛同し、様相実在論を受け入れる必要は全くな

い。だが、この議論を受け入れないのであれば、同様に時間版の議論も受け入れられるべきではないだろう。この両者の議論はかなりパラレルになっているからである。

Markosian はこのような議論が構成できる理由を語ってはいないが、その答えは容易に推察できる。議論の出発点となる二つのテーゼを構成する際に、時制と様相的表現がパラレルに扱われていた。時制論理と様相論理との共通性を考えればこのような扱いは納得がいく。つまり、時間に関する議論と様相に関する議論との共通性は、時制論理と様相論理との間の形式的平行性にに基づいている。この形式的平行性そのものから様相の形而上学と時間の形而上学の共通性が導き出されるわけではないが、この平行性を利用することで、様相についての議論からそれとパラレルな時間についての議論を構成することが容易になる。そして様相現実主義を擁護する議論は数多いと思われるので、既に論じられたそのような議論からほとんど同数の現在主義を擁護する議論が構成できることが予想される。

四次元主義者のように (MT) を否定するとしても、時制論理と様相論理の形式的平行性は確かに存在する。よって、時制論理か様相論理の少なくともどちらかの形而上学的含意を認めないかぎりには (もちろんこの選択肢もかなり有望である)、現在主義には様相的現実主義と同程度の妥当性を持つと考えるべきだと思われる。

3 貫時間的關係

一方、現在主義者の課題は、よく知られたことだろうが、非現在の存在者 (未来や過去の存在者) への見かけの量化を説明することである。一般的に現在主義者は、時制を表わすオペレーターを導入し、時制を含む文を時制を含まない文 (すなわち現在時制) に時制を表わすオペレーターがついた文によってパラフレーズすることによってこの課題を達成しようとする¹⁸。未来の存在者に関しては我々の直観は必ずしも一致しないので、とりあえず置いておくことにしよう。ここで問題となるのは過去の存在者である。

過去の存在者に関する言明であっても、確定記述が用いられているならばそ

れほど問題を引き起こさない。また、固有名を用いて過去の存在者を指示することも指示の因果説で示されているようなメカニズムを前提すれば説明可能かもしれない。おそらくもっとも問題になるケースは、過去の存在者と現在の存在者（またはより以前の過去の存在者）との関係についての文、すなわち貫時的関係の処理である。

貫時的関係が引き起こす問題を示す例として、Sider は次のような文を挙げている¹⁹。

(A) デヴィッド・ルイスはフランク・ラムジーを尊敬している。

この文は（おそらく）真であるにも関わらず、現在主義者が目指すようなパラフレーズを許さない。というのも、ルイスとラムジーが同時に存在していた時間がないからだ。（A）はせいぜいのところ次のようにしか分析できないと Sider は言う（WAS と NOW はそれぞれ過去と現在を表わしているとする）²⁰。

(A 2) デヴィッド・ルイスは次のような人物 x である：WAS (x はフランク・ラムジーを尊敬している)

(A 3) WAS (フランク・ラムジーは次のような人物 x である：NOW (デヴィッド・ルイスは x を尊敬している))

過去や未来を表わすオペレーターを用いたパラフレーズが成功するためには、核となる現在時制の文によって、そもその文が現在である場合が記述できていなければならない。しかし、貫時的関係が端的に成立している時点が常に存在するとは限らない。ルイスとラムジーの例にはまさにこのことが当てはまる。（A 2）も（A 3）も、結局問題の「尊敬関係」に関して正しい記述とはいえない。現在主義のもとでは、このような元の文が現在となりえないケースが考えられるのである。

現在主義者には二つの選択肢しか残されていないように思われる。ひとつは、Markosian や Sider（彼は現在主義者ではないが）のようにこのパラフレーズプログラムがうまくいかないことを認めることである²¹。彼らによれば、未来や

過去について語っている文は文字通りの真理を述べているのではない。ただ、日常的な場面では、それとよく似ているが貫時間的關係を含まない真な文と混同されて用いられることがある、と言う。

もうひとつの選択肢は、このような書き換えそのものを否定することである²²。Craigによれば、古典論理自体が無時制の文を対象として生み出されており、時制を重要視する現在主義者にはそのような書き換えを行うべき根拠が存在しない。さらに、存在しない対象への量化が問題なのは、量化に存在論的な含みを持たせているからだ、それはQuineのような四次元論者の主張であり、そのこと自体を疑うべきなのである。

Craigは貫時間的關係が時制論理によって記述するのが困難なのは関係そのものに未だ明らかでない点が含まれるからだと考える²³。私には、この論点はおもったもどと思われる。再び時間と様相の平行性を思い起こし、貫時間的關係の様相版、貫世界的關係について考えてみよう。私が自分はおもった背が高かったかもしれない、と考えたとしよう。このとき私は、実際の自分と可能的のみ存在する想像上の自分を比較している。この二人の間に大小関係があると言っておいように思われるが、このことは様相实在論を意味するだろうか。同様の例は可能的存在者との關係に留まらない。我々は時に虚構的存在者を実在の人物のように扱い、自分とその人との關係を述べることもある。このことによって虚構的存在者の实在性にコミットしなければならないのだろうか。当然ながら、一口に關係と言っても色々ある、と言うべきであろう。

とは言え、どちらの選択肢も一見おもったもどな主張を退ける必要がある、という点で魅力に富んだものとは言えない。では、このことは現在主義が維持困難であることを示しているのだろうか？私はそうは思わない。どちらの主張も明白な誤りではなく、考慮すべき解決策の候補である。逆に、現在主義の持つ問題点は我々が素朴に考えている「關係」や「指示」という概念がおもった複雑であることを示しているのだ、とも言えるかもしれない。可能的存在者や虚構的存在者との關係を例に挙げたように、現在主義でなくても依然問題は残るのである。

むしろこれらの問題は我々の課題を明確化していると考えの方が妥当だと私には思われる。どのような解決法をとれば現在主義の利点をおもったもど生かすこ

とができるのか。たとえ現在主義が否定される運命にあるとしても、それはこの問いに対する答えが確定してからであろう。

4 四次元段階説と現在主義

現在主義の抱える困難が大きいものであるとしてもやはり現在主義的なアプローチを採用することに意義がある。それは四次元主義との関係において明らかとなる。ここで四次元メレオロジーとはまた別の四次元主義、四次元段階説 (four-dimensional stage view) を取り上げたい。Sider は以下のような議論をもとに四次元段階説を主張している²⁴。

もし我々が貫時的な存在者、それも四次元的な時空に広がった存在者であるならば、ひとつの問題が生じる。ある人、仮に彼の名をテッドとすると、時間 t においてテッドがエドとフレッドに分裂したとしよう。この場合、エドは t 以前のテッドだった部分と t 以後のエドとなった部分のメレオロジカルな結合体と考えられる。そしてフレッドの方にも同様のことが成り立つはずなので、エドとフレッドはテッドであった部分を共有することになる。すると、エドとフレッドに分裂する以前、一見テッド一人しかいなかったように見えるが、実は二人の人間がいたことになるのだろうか²⁵。

もちろんこの問題から直接的に四次元主義の問題点が示されるわけではない。四次元メレオロジストならば、この場合、テッドはエドともフレッドとも記述可能であるに過ぎない、と答えられるからである。つまり、記述の仕方が複数存在するだけで、複数の個体が存在するわけではない。だが、メレオロジストにとっても問題がある。四次元メレオロジ的視点からはエドとフレッドは共有している時間的部分を持つが異なった個体だからだ。すなわち、テッドが存在していたならば既にエドの一部でありかつフレッドの一部が存在していたことになるので、四次元メレオロジストは、 t 以前においてエドもフレッドも存在すると言わねばならない。

四次元的視点を維持しつつ、このような一見したところ直観に反するように思われる記述を避けるには、 t 以前に端的にエドやフレッドが存在するという言い方を回避する必要があるだろう。そのひとつの方法が、四次元段階説で

ある。つまり、エドもフレッドも t 以前においてはある段階として（つまりテッドとして存在していた）とする立場である。

実際 Sider は、この問いにもっともよい答えを与えられるのは四次元段階説だ、と主張する。四次元段階説によれば、我々は瞬間的に存在する段階であり、その瞬間の以前においても以後においても存在しない（この点が現在主義と似ていることに注意されたい）²⁶。しかし、四次元段階説は過去や未来の自分の存在を否定しない。四次元段階説では過去や未来の自分は現在の自分と対応する別の段階である²⁷。現在の自分は、少年である過去の対応者を持つ場合に「以前少年だった」と言うことができ、老人である未来の対応者を持つならば「後に老人となる」と言うことができる²⁸。

いま問題としている分裂のケースの場合、「 t 以後において、テッドは存在する」という *de dicto* 文は真ではない。存在するのはテッドの対応者に過ぎないからだ。だが、「テッドは、 t 以後にも存在する」という *de re* 文は真である。テッドは t 以後に対応者を持つので、その意味で未来においても存在していると言えるのである²⁹。

四次元段階説では、当初の問題、すなわち「 t 以前には何人いたのか？」に対して、直観的にも妥当に思われる「一人」という答えを与えることが可能になる。そしてメレオロジストにとっての問題に関しては、エドもフレッドも t 以前に存在する対応者を持つ、という意味で t 以前にも存在している、という答えが与えられる。

この四次元段階説によって与えられる解答が現在主義の解答と類似している点は注目すべきであると思われる。現在主義ではこのような問題が生じえないことは明白であろう。どの時点が現在だとしてもエドとフレッドが存在するときはエドとフレッドの二人が存在しており、テッドしか存在していないのならばテッドただ一人しか存在しない。もしテッドがいずれエドとフレッドに分裂することが分かっているならば、テッドしか存在してなくてもエドとフレッドが存在していたと言ってよいかもしれない。しかしそういう場合も「後にエドになる男」と「後にフレッドになる男」が存在していた、という以上の存在論的コミットメントは不要である。

四次元段階説は現在主義と共通する論点を持つ。ひとつは、様相と時間の平

行性を重要視することである。Sider 自身が言うように、四次元段階説は時間に関する対応者理論として捉えられる³⁰。もうひとつは、我々がある特定の時点において完全に存在することを受け入れる点である。各時点において瞬間的にのみ存在するとされる段階は我々そのものであり、我々の部分ではない。逆に言うと、我々は段階によって構成された全体でもなければ、各段階から gen-identity 的に構成された貫時間的存在でもないのである。よってこの立場は四次元メレオロジーではない。むしろ、様相と時間の平行性を深刻に考えるならば四次元メレオロジーを採用すべきでないのである。

たしかに四次元段階説はすべての問題を解決できるもっとも望ましい立場であるという主張はもっともであろう。しかし、四次元段階説と現在主義の共通性は一体何を意味しているのだろうか。まず、分裂のケースに関して、既に見たように四次元段階説と現在主義はほぼ同じ答えを返す。次に、時間的内在的性質に関して、両者は共に、矛盾した性質を持つ個体がない、という答えになる³¹。両者に違いが生じるのは、時制に関する文を処理するときに限られるように思われる。

このことは、四次元段階説とは現在主義から理論的単純さを保つために四次元主義の形而上学をくつつけたものではないか、という疑惑を抱かせる³²。実際、四次元段階説の時制論理と現在主義の時制論理に違いは少ない。どちらも同じ可能世界意味論をもとにした意味論が与えられる。違いは、可能世界に対応する時点（あるいは時区間）が実在するのか、それとも現在をもとに構成されているのか、という点に尽きるように思われる。だとすると、第二節で取り上げた様相可能主義との類似性に基づく批判がそのまま四次元段階説に当てはまるだろう。つまり、四次元段階説にとって、現在以外の時間は可能世界に等しい。そこに実在性を求めるのは理論的単純さのための代償としては高すぎるのではないだろうか³³。

ここで我々には三つの選択肢がある。一つ目は、時制論理と様相論理の平行性を放棄し、四次元メレオロジーを採用する道である。二つ目は、四次元主義は維持しつつも、時制論理と様相論理の平行性を認める四次元段階説である。最後の三つ目は、時制論理と様相論理の平行性を認めるが、四次元段階説にとって四次元主義が本質的でない点を鑑み、四次元主義を放棄する道、すなわち

現在主義である。だが言うまでもなく、現在主義には前節で述べた問題が残されている。

5 まとめと結語

これまでの論じた点をまとめると、まず、時制論理と様相論理の平行性を認めるならば、現在主義は時間版様相現実主義と考えられる。次に、現在主義には貫時間関係を説明するという課題が残されているが、これは必ずしも反証であるとは言えない。そして、人格の同一性に関して提案された四次元段階説は、四次元メレオロジーに対する反論という点で現在主義と同路線であり、現在主義との違いは形而上学的に四次元主義を採用している点に留まる。

さて、以上の議論が正しいならば、我々が最終的に到達したのは状況は次のような状況だと私には思われる。

この種の形而上学的論争に慣れ親しんだものは誰も、しばしば到達するある種の行き詰まりにも慣れ親しんでいる：いくつかの競合する見解が残された。そのどれもが内部的には整合的だが、直観的にはもつともだと思われぬ特徴あるいは帰結をもつ。問題は、我々が受け入れたいのはどの帰結なのか、である。このような行き詰まりに到達したとき、それは議論の役割が終わるときである。だが理性の役割が終わるときではない。よい判断が求められているのだ²⁴。

だとすると、現在の問題の場合、よい判断とはどのような判断なのだろうか？

註

¹ Lewis (1986), p. 204.

² もちろん本論文でもこの問題を見捨てたりはしない。この問題は後の第二節で論じる。

³ 実際、ほとんどの現在主義者は他の立場の哲学者と同様、変化や持続を認めるだろう

(Proir は認めないと思われるが)。c.f. Craig (1998), note 7.

⁴ Mellor はさらに冷淡である。彼は、現在主義者の観点では、18 世紀の世界と現在の世界に共通する存在者が少ないことを問題視している (Mellor (1998), p. 20)。しかしこのことは現在主義者にとってむしろ受け入れたい帰結であり、それが問題となるのは Mellor のように過去言明に対する truth maker として過去の存在者を要求するような立場を取るからだと思われる。

⁵ Sider (2000), p. 85.

⁶ Lewis (1986), p. 204。ちなみにこの解決法は、時間的内在的性質を持つのは我々の時間的部分だ、という立場である。

⁷ *ibid.*, p. 204.

⁸ アウグスティヌスや Prior に始まり、Markosian や Craig に至る様々な現在主義者をどのように整理すべきか、という問題は非常に興味深い。

⁹ c.f. Sider (1999), p. 325; Markosian (1994), p. 244; Craig (2001), p. 41

¹⁰ Sider (1999), p. 325.

¹¹ 様相可能主義の疑わしさを根拠に反現実主義を否定する哲学者の例として、Craig が挙げられる。Craig (2001), p. 41-を参照されたい。

¹² 四次元主義を擁護する議論には数多くの種類があり、それぞれの議論が必要とする存在論的前提も同一ではない、と言われることもあるからだ。この論点については、Heller (1993), p.48 を参照されたい。

¹³ Markosian (forthcoming), p.3.ただしこの文献への参照は彼のホームページにある PDF へのものである。また、ここでいう B 理論とは、過去、現在、未来、といった時間の A 性質を認めず、出来事どうしの時間的關係 - B 関係 - だけで十分だと考える立場のことである。この A-B 論争に関しては、Mellor (1998)の第一章が簡潔な説明を与えてくれる。

¹⁴ Markosian はこのような立場を、時間の新しい無時制理論 (new tenseless theory of time) と呼んでいる。

¹⁵ これは時制の指標的分析テーゼ (indexical analysis of tense) と呼ばれている。

¹⁶ 同様にこのテーゼは、真理条件からの時制オペレーター消去可能性テーゼ (eliminability of tense operators from truth conditions) とされる。

¹⁷ 先の二つのテーゼと同じく、このテーゼはそれぞれ現実性の指標的分析テーゼ (indexical analysis of actuality)、および真理条件からの様相オペレーター消去可能性テーゼ (eliminability of modal operators from truth conditions) と呼ばれている。

¹⁸ つまり、このパラフレーズの結果、量化は時制オペレーターのスコープ内部の現在時制の文にのみ関わることになるので。

¹⁹ 以下の議論は、Sider (1999), p.4-6 に基づいている。また、この文献への参照も彼のホームページにある PDF ファイルへのものである。

²⁰ *ibid.*, p. 6.

²¹ *ibid.*, p. 6-7.直後の個所で Sider はこの立場が Markosian に従ったものであることを述べている。

²² Craig (2001), p. 37.

²³ *ibid.*, p. 38-9.

²⁴ Sider (1996), p. 3.

²⁵ Sider によれば、この問題を説明するひとつの方法は Lewis のように「数える」という概念を問題視することである。すなわち、「数える」のある意味においては二人の人間がいると言えない、と結論を導く議論だ。この方法は一見したところのもっともらしさを持つかもしれないが、うまくいかない。と言うのは、この説明によれば問題の例では「数える」のある特定の読みが強制されなければならないが、一般的な読みを排除する根拠がないからである (*ibid.*, p. 10-15.)。「数える」という概念に複数の読みがあることは他にもいくつかの問題と関係するように思われるが、ここでは問題にしないことにする。

²⁶ *ibid.*, p.6.

²⁷ 後に言及するが、この意味で四次元段階説は様相実在論プラス対応者理論の時間版と言ってもよいだろう。そして Sider もまた、時間と様相の平行性を認めている。

²⁸ *ibid.*, p.7.

²⁹ *ibid.*, p.29.

³⁰ *ibid.*, p.7.

³¹ すなわち、四次元メレオロジーでは、我々は時間的に異なった部分に関して矛盾した性質を持つことになるが、四次元段階説では、矛盾した性質を持つ対応者がいるに過ぎない。

³² Sider 自身も四次元段階説を説明するときに、くどいぐらい現在主義との違いを強調しているところがむしろ怪しい。

³³ 加えて、三次元主義者と四次元主義者との論争を、ある時点において完全に存在するという立場と部分だけしか存在しないとする立場との対立だとすると、四次元段階説はその「四次元」という名称にも関わらず、三次元主義に分類されるだろう。もっとも、三次元主義者の代表格である van Inwagen の立場が単なる形而上学的な三次元主義ではなく 3+1 次元主義と呼べるような立場であることを考えると、これは当然のことなのかもしれない。

³⁴ Sider (2000), p. 86.

参考文献

Craig, W. L., (1998), "McTaggart's Paradox and the Problem of Temporary Intrinsic," *Analysis*, 58, 122-127.

- Craig, W. L., (2001), "McTaggart's Paradox and Temporal Solipsism," *Australasian Journal of Philosophy*, **79**, 32-44.
- Heller, M., (1993), "Varieties of Four Dimensionalism," *Australasian Journal of Philosophy*, **71**, 47-59.
- Lewis, D., (1986), *On the Plurality of Worlds*, Blackwell.
- Markosian, N., (1994), "The 3D/4D Controversy and Non-present Objects," *Philosophical Papers*, **23**, 234-349.
- Markosian, N., (forthcoming), "Critical Study of 'Questions of Time and Tense' edited by Robin LePoidvin," *Nous*, (<http://www.ac.wvu.edu/~markosia/papers/CS.pdf>).
- Mellor, D. H., (1998), *Real Time II*, Routledge.
- Sider, T., (1996), "All the World's Stage," *Australasian Journal of Philosophy*, **74**, 433-53.
- Sider, T., (1999), "Presentism and Ontological Commitment," *Journal of Philosophy*, **96**, 325-347, (<http://web.syr.edu/~trsider/papers/presentism.pdf>).
- Sider, T., (2000), "The Stage View and Temporary Intrinsic," *Analysis*, **60**, 84-88.
- van Inwagen, P., (1990), "Four-Dimensional Objects," *Nous*, **24**, 245-255.

(こやま とら／大阪大学)